

本書は、紙資料の劣化の要因と機構を、近年の科学的研究の成果に基づいて理解し、どうすれば劣化を抑制できるのかを考えていくために書かれた本である。資料保存に携わっている多くの文系出身者のために、応用化学出身の著者が、紙資料の劣化について、化学的記述を駆使しつつも、分かりやすく解説している。紙を科学的に理解するための入門書とでも言えよう。

まず、簡単な製紙科学と、現代の一般的な製紙工程の解説から始まる。主成分であるセルロースがいかにか結合して、あのしなやかな独特の風合を持った紙になるかを、工程に沿って分かりやすく解説していく。

次に、紙資料の劣化の原因とメカニズムについて考察する。紙資料の劣化は、その要因から、物理的劣化、化学的劣化、及び生物的劣化の三つに大別できる。実際にはそれらが複雑に絡み合っており、より深刻な劣化をもたらしている。

また、近年深刻化してきた酸性紙劣化の問題についても、酸性紙が生まれてきた歴史的経緯に加えて、欧米と比較した日本の現状を述べている。

最後に、これら劣化の原因を踏まえて、紙資料を劣化から守るために、現在考え得る手段、及び行われている手段についての解説を行う。すでに劣化した資料の修復方法については、それぞれの方法におけるメリットと同時に、デメリットも考え、各資料にあった修復方法を選択することが必要であると指摘している。

これからの資料保存を考えていくためには、紙資料を取り巻く、こうした原理を理解することが、最も安全で合理的な方法である。

著者も述べるように、原理を理解することにより、紙を取り巻く多様な問題に正しく対処できるようになる。単なる知識として、資料保存にとって「なにが良いのか、なにが悪いのか」ということを機械的に覚えるのではなく、「何故、良いのか、何故、悪いのか」を理解することこそが重要であり、そこから、より幅広い対応を見出すことができる。

保存に関わる人々は、紙資料にとって最適な環境を考える際に、紙の性質を科学的に理解し

## ■ 図書紹介 ■

鈴木英治著「紙の劣化と資料保存」

日本図書館協会 資料保存委員会 編集企画  
シリーズ・本を残す④

(社)日本図書館協会発行 1993.7 A5 126p

ようとする姿勢が必要だろう。むろん、高度な理解は、著者のような専門家に任せておけば良いのだが、基本的な科学知識を持つことによって、保存に対して、より積極的に取り組むことが可能となるだろう。

また、劣化資料の修復に携わる人々は、伝統的な修復技術に加え、本書を足掛かりとして、紙の科学的理解に基づいた修復技術を、より発展させていくことがますます必要になってくるだろう。

本書のような、一般向けにまとめられた解説

書は今まで無かったと言えよう。しかし、本書は、繰り返すが、入門書にすぎない。資料保存に携わる全ての人が、本書を物足りなく思えるようになることを望む。

(石井里佳・(財)元興寺文化財研究所保存科学センター)

■第47回FID(国際情報ドキュメンテーション連盟)国際会議(1994年10月2~9日、於:大宮ソニックシティ)での報告者(ただし英語)募集のお知らせ

報告者応募締切:1994年4月中旬まで

応募先・問い合わせ先:国際資料研究所/小川千代子(電話 03-3443-7328,FAX 03-3443-3439)